

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 24 日現在

機関番号：11301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26570002

研究課題名(和文) 日韓歴史認識問題の起源と展開 戦後初期と1990年代を中心に

研究課題名(英文) The origin and development of the history recognition problem between Japan and Korea : focusing early post-war period and 1990's

研究代表者

佐野 正人 (SANO, MASATO)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：90248724

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は日韓の歴史認識問題に関して、戦後初期と1990年代を中心に再検討するという計画の下で、研究を行った。まず、戦後初期と1990年代のマスメディア資料、文学関係資料、映画・ドラマ関係資料を体系的に調べ、目録を作成した。

2016年2月にシンポジウム「日韓の相互認識と歴史認識 戦後の映画と文学を中心に」を開催し、また2017年2月に「メディア/大衆文化の日本・韓国 失われた朝鮮映画を求めて」を開催し、シンポジウムの組織とともに、日韓の歴史認識に関する発表を行った。また慰安婦問題をめぐって、2017年3月に韓国全南大学校で研究討論会を行い、発表と意見交換を行った。

研究成果の概要(英文)：I started this study under the plan that I reexamined mainly on the early post-war period and the 1990s about the issue of Japan-Korea history recognition. At first I checked the mass media documents of the early post-war period and 1990s, the documents about literature, and movies, dramas. I checked those documents systematically and made a list.

And I held a symposium about "Japan-Korea mutual recognition and history recognition : mainly on postwar movie and literature" in February, 2016, and held a symposium about "The media / mass culture of Japan and Korea : searching for the lost Korean movies" again in February, 2017. With the organization of the symposiums I conducted presentations about the problem of Japan-Korea history recognition. In addition, over the issue of Charity Dame, I performed a study panel discussion in Korean Chonnam University in March, 2017 and exchanged opinions with presentation.

研究分野：日韓比較文学、日韓比較文化

キーワード：日本 韓国 歴史認識問題 マスメディア 映画 ドラマ 慰安婦問題 光州事件

1、研究開始当初の背景

(1) 2011年に韓国の憲法裁判所で、韓国政府が元慰安婦の対日損害賠償請求権問題に関して努力をしないのは憲法違反であるという判決が出され、それを受けて当時の李明博大統領は2012年に独島(日本名:竹島)に抗議の意味を込めて上陸した。これを受けて日韓の関係は悪化し、歴史認識問題が日韓の間での政治的な問題として浮上した。

韓国文化の研究者として、この歴史認識問題に関しては日韓のコミュニケーションギャップがあることを痛感し、この問題を解決するためには歴史認識が形成される過程を再検討しコミュニケーションギャップの解消に努めるべきだという判断の下、本研究をスタートさせることになった。

(2) コミュニケーションギャップの大きな原因は二つあるものと考えた。その一つは戦後初期に韓国が日本の植民地支配から解放され独立国家として立ち上げられる際に形成された韓国の歴史認識やアイデンティティと、戦後の日本を立ち上げるに際してのそれらとの間で日韓の認識が食いちがっておりコミュニケーションの障害となっているであり、また第二点として、1990年代に韓国が民主化を行いそれまで軍事政権の下で抑圧されてきた慰安婦問題や独島(竹島)問題などが本格的にメディアに登場するようになることに関して、日本側の認識が不足している点の二つを重要なコミュニケーションギャップの問題として設定した。

2、研究の目的

(1) 日韓の歴史認識問題を解決していくためには、日韓の間でのコミュニケーション

ギャップを解きほぐしていく必要性を痛感したため、戦後の時期に遡って日韓のコミュニケーションギャップの生じることになった背景と原因について明らかにすることを研究の目的と設定した。

(2) その目的のため、第一に戦後初期に形成された韓国の歴史意識およびアイデンティティのあり方と、また同時期に形成された戦後日本の歴史意識およびアイデンティティとを比較検討することを第一の課題とした。その課題のために、マスメディアでの歴史意識の形成と展開、文学での歴史意識の展開と変化、映画・ドラマでの歴史意識の形成と変化、という3つの方法を設定した。

(3) また、韓国の民主化が進んだ1990年代の変化に関して、その時期の日韓での歴史意識の展開や変化の様相を検討することを第二の課題とした。民主化によって韓国ではそれまでタブーとされてきた慰安婦問題や独島(竹島)問題などがメディアによって本格的に提起されることになった。しかし、同時期の日本ではそのような歴史的な文脈については十分な理解が不足していたため、そこにコミュニケーションギャップが生じることになった。そのため、特に1990年代のマスメディアと映画・ドラマとを取り上げて検討することとした。

3、研究の方法

(1) 戦後初期の韓国と同時期の日本での歴史意識とアイデンティティの問題を追究するために、マスメディアにおける歴史意識の形成と展開、文学での歴史意識の展開、映画、ドラマにおける歴史意識の形成と展開、という3つの方法を設定した。

基本的な資料調査を行い、その上で重要な作品を選定して相互に比較するという方法をとった。

(2) 1990年代の韓国での歴史意識の変化に関しては、光州事件(1980年)のマスメディアでの表象が変化していく過程を検証した。また、文学作品、映画・ドラマにおいて慰安婦の表象が変化していく経緯を検証した。また、同時期の日本での文学作品や映画・ドラマとの比較という作業も同時に行った。

(3) それらの作業を行うとともに、2016年、2017年にシンポジウムを開催し、戦後の日韓の歴史意識と相互認識をめぐって相互のコミュニケーションと問題の共有を図った。また、慰安婦問題をめぐって韓国で研究討論会を行い、日韓の問題意識のギャップを議論し、意見交換を行った。

4、研究成果

(1) 戦後初期の文学作品と映画作品について資料調査を東京の近代文学館、フィルムセンター、またソウルの映像資料院、国立図書館などで行い、基礎となる資料目録を作成した。

(2) 戦後初期の韓国と日本で、歴史意識やアイデンティティに関係すると思われる文学作品や映画作品についてピックアップし、それを基にして相互比較する作業を行った。

(3) 2016年2月13日にシンポジウム「日韓の相互認識と歴史認識 戦後の映画と文学を中心に」を東北大学国際文化研究科において開催し、日韓の研究者による問題の多角度からの接近を試み、相互の意見交換を行った。佐野は「戦後の日韓の映画における主体の形成 崔寅奎『自由万

歳』と黒澤明『わが青春に悔なし』」の発表を行い、新たな戦後社会を担う「主体」を立ち上げることが戦後初期の韓国と日本において切実な問題であったことを明らかにした。また、戦後初期における日韓の歴史意識やアイデンティティはむしろ共通する要素を多く持っていたことを指摘した。

(4) 1990年代の日韓での歴史意識とアイデンティティに関しては、まず代表的な文学作品と映画作品に関して、資料調査を行い、基礎的な資料目録を作成した。そのうえで、重要な作品をピックアップし、比較する作業を行った。

(5) 特に韓国の民主化運動を検討するうえで、1980年に起こった光州事件をどのように評価し、また文学や映画で表象していったのかを検討することは重要な課題だと考えられたため、韓国の光州市を訪れ518記念館や全南大学校518資料館などでの資料調査を行った。

(6) 同様に従軍慰安婦についてもやはり1990年代に全国的な問題として浮上したことが見られるが、慰安婦問題が浮上したことは韓国の民主化ということと切り離せない側面を持っており、そのことの認識を日本では十分に持っていないことが指摘できる。そのためにコミュニケーションの大きなギャップが生じており、この民主化 民主的マスコミの登場 慰安婦問題の浮上ドラマによる国民的な認識の広まり、という一連の事態を認識し共有することで、両国のコミュニケーションギャップはいくらかでも埋めることができるのではないかと考えられる。

(7) シンポジウム「メディア/大衆文化の

日本・韓国 失われた朝鮮映画を求めて
」を日韓の研究者によって2017年2月24日に開催した。佐野は「1980～90年代のメディア的変動の中の日韓関係」という発表を行い、慰安婦問題の浮上などをめぐって討議を行った。1980年代の日本と韓国では同様に新世代が現れていくものの、その「主体」の内実は大きく異なり、むしろ対照的といってもいいものだったこと、韓国での歴史認識問題の浮上と、日本でのそれに対するコミュニケーションギャップは、そのような1980年代の新世代の「主体」の対照的な性格にも拠っていることを指摘した。

(8) 2017年3月には韓国全南大学で慰安婦問題をテーマとした研究討論会を持った。そこで佐野は「『帝国の慰安婦』をめぐるいくつかの問題」という提題発表を行い、討議を行った。

(9) 結論的に、日韓の歴史認識問題が大きな政治的・社会的な問題となったのは、戦後直後よりむしろ韓国の民主化が進んだ1990年代のことであることが明らかとなった。韓国では民主的メディアの登場によって慰安婦問題、独島(竹島)問題などのタブーとされてきた問題が浮上したのに対して、1990年代の日本では歴史的・社会的なコンテクストから切り離された新世代が登場し、コミュニケーションギャップが広がったものと考えられる。そのため葛藤と対立が広がり、現在に至っている。この現状を打開するためには、1990年代以後の韓国の民主化の中での歴史認識問題の国民的浮上という文脈を理解し共有したうえで、和解の道を探るという作業が必要となるだろう。

引用文献

- 朴裕河 『帝国の慰安婦 植民地支配と記憶の闘い』(朝日新聞出版、2014年)
朴裕河 『 一식민지 지배와 기억의 투쟁 (帝国の慰安婦—植民地支配と記憶の闘争) 』(뿌리와이파리、2013年)

5、主な発表論文等

[学会発表](計3件)

全南大学校『帝国の慰安婦』研究討論会、2017年3月27日(月)、韓国全南大学校

佐野正人「『帝国の慰安婦』をめぐるいくつかの問題」

シンポジウム「メディア/大衆文化の日本・韓国 失われた朝鮮映画を求めて」、2017年2月24日(金)、佐賀女子短期大学411教室

佐野正人「1980～90年代のメディア的変動の中の日韓関係」

シンポジウム「日韓の相互認識と歴史認識 戦後の映画と文学を中心に」、2016年2月13日(土)、東北大学国際文化研究科会議室

佐野正人「戦後の日韓の映画における主体の形成 崔寅奎『自由万歳』と黒澤明『わが青春に悔なし』

6、研究組織

(1) 研究代表者

佐野 正人 (SANO Masato)

東北大学・国際文化研究科・准教授

研究者番号：90248724

(2) 連携研究者

長澤 雅春 (NAGASAWA Masaharu)

佐賀女子短期大学・地域みらい学科・教授

研究者番号：00310920

吉原 ゆかり (YOSIHARA Yukari)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：70249621

波瀆 剛 (NAMIGATA Tsuyoshi)

九州大学・比較社会文化研究科 (研究院)・准教授

研究者番号：10432882

渡辺 直紀 (WATANABE Naoki)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：80409367

(3) 研究協力者

金 貞禮 (KIM Joengrye)

韓国全南大学校・教授

朴 裕河 (PARK Yuha)

韓国世宗大学・教授

Bang Min-Ho

ソウル大学・副教授

鄭 琮樺 (CHONG Jonghwa)

韓国映像資料院・研究員

李 惠眞 (LEE Hwejin)

韓国世明大学・助教授

Ham Chunbom

韓国高麗大学・研究教授